

スターレター・プロジェクト。それは少年・少女の「願い」を乗せただけの陳腐な計画だったはずだ。——けれど、その計画こそが全ての歪曲の始まりでもあった。

未那月刀剣術師範代並びにARRAMs代表・未那月美紀著『日常歪曲談』の冒頭より抜粋。

00

「これでようやく……」

神室夕星は、全能感に満たされていた。指先を動かす度に「完成」に近づいていくソレの姿を前に、笑みを漏らしてしまうのも仕方のないことであろう。

五〇〇以上のパーツから成るヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「何を作ってるのよ、アンタはッ——！」

脳天を突き抜ける衝撃は浸っていた空想の悉くを破壊して、夕星を現実へと引き戻す。

「うぐッ!？」

そのまま夕星は前のめりに転倒。広げてあった工具諸々をばら撒きながらに額を打ちつけた。ばら撒かれた工具は、プラスチック用片刃ニッパー（税込五二八〇円）、スポンジヤスリ六〇〇番から一二〇〇番（全て合わせて税込七一五円）

そして、夕星が丹精込めて作り上げたプラモデル。一／二〇〇（エクステンド）（税込一二八〇〇円）だ。

「ッッ——！」

夕星は咄嗟に身を捻り、落下するエクステンドを受け止めた。床に衝突するまでの距離はわずかに数ミリ。

これはギリギリセーフといったところか。

アンテナや装甲の先端部など、折れやすい箇所が無事であることを確認した夕星は、振り返って、自らを背後から殴りつけたであろう人物を恨めしそうに睨んだ。

「痛っ……いきなり、何すんだよッ！」

「……」

そこに立つのは、ボブカットの少女だ。

丸っこい猫目をめいっばい細めた彼女は、夕星に負けじと睨み返してきた。

「いきなり何も、学校に来てまで玩具で遊んでる斗真が悪いに決まってるじゃない」

そう、ここは私立天川あまのがわ高等学校・二年一組の教室であった。

やいのやいのと言いつつ二人の元にはクラスメイト達の視線を集めるが、それもほんの一瞬のこと。「またクラス一のバカと委員長が何か探めてるんだ」と理解した全員が、見飽きた日常から視線を逸らす。

「玩具って……だから何度も言ってるだろ！ この〈エクステンド〉はただの玩具じゃないって！」

夕星の目の下にはマーカーペンで引いたような濃いクマがあった。これは寝る間も惜しんで〈エクステンド〉を制作していた故のものである。

キットを手に入れたから今日で三日だ。一分でも、一秒でも早く完成品が見たかった夕星は空き時間を見つけては、それが何処であろうとも制作を続けていた。

それだけの熱意と愛情を注ぎ込んだのだから、〈エクステンド〉は既にただの玩具に非ず。誠心誠意作り上げた一つの作品、或いは夕星自身の分身とさえも言えた。

けれど、そんな想いが他者に理解されるわけもなく。

「何言ってるの。こんなの、ただの玩具じゃない」

彼女には徹頭徹尾、正論で返されてしまった。

終いには「学級委員として、生徒指導に報告しなくちゃならない」と脅されたので、斗真は泣く泣く広げた工具を片付け始める。

「畜生……ヒバチは男のロマンってもんがわからねえからなあ……」

「聞こえてるわよ。あといい加減、ヒバチって呼ぶのやめてよね。小学校の頃の仇名で私のことを呼ぶのなんて、もうアンタくらいよ」

ヒバチ。——基い、藤森陽真里は不服そうに眉根を寄せた。

二人の関係性を有体に言い表すのであれば、「腐れ縁」或いは「幼馴染」とするのが一番適切なであろう。けれども、その性格は鏡合わせのように違っていた。

首元が苦しいからという理由で制服のネクタイをダラリと緩めた夕星と、学校指定のブレザーを規定通りにキッチリと着こなす陽真里。二人の対称性は制服の着こなしの一つにも現れていた。

「けど、何というか意外よね。中学ではあんなに荒れてたアンタが、更生して、ここまでオタク趣味にのめり込むなんて」

「……んだよ、悪いかよ。今や日本の漫画やアニメーションは世界に誇れる文化なんだぜ」

「別に卑下する意図はないわよ。私だってゲーム好きだし、ソーシャルゲームのガチャで推しが出るか出ないかに一喜一憂してるくらいだもん。……けどね、夕星の場合は、のめり込み方

が極端だって言ってるの!」

確かに夕星は、小さい頃から何かとハマりやすい方であった。

中学の頃とはガラリと様変わりした自室のことを思い出す。

壁に貼ってあったグラビア写真はアニメのポスターに様変わりしたし、筋トレ器具は軒並み、漫画雑誌やライトノベルに置き換わった。

先月には遂にプラモデルやフィギュアを飾るためのショーウィンドウを購入する程だ。

「色々買ってるみたいだけど、お金、大丈夫なの?」

「うっ……!」

痛いところを突かれて言葉を詰まらせた。

一ヶ月分のバイト代を全て趣味に費やしたことが彼女にバレれば、やれ「貯金しろ」だの、やれ「もっと計画的に使え」だの、お説教を食らうことは目に見えているのだ。

「だいたい、この子は幾らぐらいしたの?」

陽真里は、片付けようとしたエクステンドをヒョイと摘み上げて、訝しそうに尋ねた。

「おい、ヒバチ! そんな雑な持ち方すんなよ! 下手に触って、壊れたら俺の三日間の努力が!」

「ヒバチじゃなくて陽真里だって言ってるでしょ! けど、そうね……確かにすごく精密だし、ざっと三〇〇〇円ってところかしら?」

「えっ……いや、それは」

「五〇〇〇円とか? それともまさか七〇〇〇円もするんじゃない?」

税込一二八〇〇円だなんて口が裂けても言えるわけがない。

夕星の額には冷や汗が浮いて、次第に顔色も青くなってゆく。

「えっ、えっ……と、半額セール品で五〇〇円くらいかなあ……あはは……」

「うん、アンタのその表情でだいたい分かったわ。多分、一〇〇〇〇円くらいしたのね」
当たらずしも遠からず。

呆れ返った陽真里は重苦しく嘆息を吐いた。

「私だって、アニメや漫画の中のロボットを手にとってみたいって気持ちは十分に分かる。ほんの一時でもフィクションにのめり込みたいって気持ちもね。だけどさ、このへエクステンドの場合——」

ほんの一瞬、校舎が揺れた。次いで、開け放たれた窓からは轟々とした風が吹き込んでくる。

「……はあ、また来たみたいね」

外を見れば何か巨大なシルエットが滑空し、校舎を飛び越えて行ったのだと理解できる。

けれど、クラスメイトの誰もがシルエットについて反応をする訳じゃない。まるで、それが彼らにとつての「日常」であるように。

高度を下げたシルエットは、やがて大通りへと足をつけた。全身の緩衝器サスペンションを忙しくなく稼

働させながらも着地しようとする一部始終は、夕星たちのいる教室からでも伺えた。

ヒト型の内部骨格と全身を覆う強化装甲群。

機械仕掛けの武者を思わせ、据えられた双眸を翡翠色に煌めかせた姿は、陽真里の手にしたプラモデルをそのまま大きくしたようであった。

いや、それは違う。

正確に言えば、あの巨大なマシンを元に一〇〇〇〈エクステンド〉のプラモデルが作られ、販売されたのだ。

「だけどさ、〈エクステンド〉の場合は、」

陽真里は戦闘体制を取ろうとするマシンを見つめながらに、途切れていた言葉の続きを紡ぐ。

「——本物がすぐその現実にいる。ノンフィクションの産物じゃない」

01

頭部の装甲に「EXTEND/00」と印字されていたから、鉄の巨人はそのまま〈エクステンド〉と呼ばれるようになった。

正式名称・所属は共に不明。全長は三〇メートル前後、重量は五〇トン程度と推定。いつ、どこで、誰が、何の為に建造したのかも、正式な発表は未だ為されていない。

気まぐれに上空から飛来して、主に東京の天川市あまがわに降り立つ〈エクステンド〉について判明していることは、詰まるところ何もないのである。

けれど、「その巨人が何を為すか」だけは、この世界の誰もが知っていた——



空から降って来た〈エクステンド〉。そして、向かいの空からも同スケールの何かが迫って来る。

〈エクステンド〉と同じように大気を揺らし、同じように市街地に影を落としながらに。けれど、着地の仕方だけはまるっきり正反対であった。

〈エクステンド〉が接地の瞬間に全身を折り、衝撃を殺したのに対して、あとから現れたソイツは自らの巨体を街に叩き続けたのだ。

ビルを薙ぎ倒しながらに粉塵を巻き上げる様は、自らの力を誇示しているようであった。

そして、粉塵が晴れた先にソイツの姿が明らかとなっていく。

まず着目すべきは両腕に備えた巨大なハサミのシルエットである。次いで、真っ赤な甲殻が全身を覆っていることに気付かされた。

「——今月はザリガニの怪獣なんだな」

クラスの誰かが、そんな風に呟いた。

口に泡を蓄えながらに〈エクステンド〉を威嚇する姿なんて、小さい頃に池で捕まえたザリガニそのままだ。

〈エクステンド〉の明滅するカメラアイと、複眼が集合した故に黒い球体状を成したザリガニ怪獣の瞳が睨み合う。

実際には睨み合っていないのかもしれないが、少なくとも夕星にはそう見えたのだ。

「負けるなよ、〈エクステンド〉！」

あのハサミから繰り出される挟撃を掻い潜り、分厚い甲殻をどう打ち破るか？

その瞬間を見逃さないために、夕星は窓際へと駆け寄った。身を乗り出しながらに興奮を隠しきれない自分の姿は、テレビの特撮番組に食い入る子供のようにも見えてしまうのだろう。

だが、そんな姿は陽真里を怒らせる要因になり得た。

「こらッ！ 何見入ってるのよ！」

またも夕星の頭には、彼女の鉄拳制裁が振り下ろされる。

「ツツ……痛ってえ！ こんにやろう、また叩きやがったな！」

「叩きもするわよ。休み時間にこっそりとプラモデルを作る程度ならまだ理解できるし、〈エクステンド〉が好きだって気持ちも尊重する。だけど、暴れ出すところを楽しそうに観戦するのは不謹慎でしょ！」

「暴れ出すって……〈エクステンド〉はいつも謎の怪獣から俺たちの街を守ってくれるじゃねえか。それに、あの辺はシエルターも多い地域だから被害だって少ないだろうし」

「言い訳しない！ 被害が多いとか、少ないとか、そういう問題じゃないでしょ！」

実際、陽真里の持つ価値観の方が正しく、模範的なのであろう。

だが、夕星たちの中では「巨大ロボット〈エクステンド〉と謎の怪獣が現れては殴り合いを繰り返す」という非現実的なフィクションが、半ば現実的なノンフィクションへと変わり始めていた。

およそ三年前。——初めて〈エクステンド〉と怪獣が現れ、街で乱闘を繰り広げた際には自衛隊の戦闘機が飛び出すは、世界中のメディアがこぞって夕星たちの町を訪れるはで、大パニックへと発展した。

けれど、「喉元過ぎれば何とやら」というのが人の性である。

この三年間で避難マニュアルが浸透し、避難用シエルターや耐怪獣建築の頑強なビル群が増えるに連れて、次第に〈エクステンド〉に抱く危機感を忘れていったのだ。

一か月に一度は怪獣が現れ、〈エクステンド〉が多少の苦戦をしながらも倒していくというテンプレ通りのシナリオと、事態が起る頻度も、危機感を喪失させる要因になり得たのだから。

おまけに〈エクステンド〉や怪獣について、世界有数の研究チームがどれだけ調査を続けても、新たな事実が何一つ判明しないのだから、「あれは、ああいう概念なんだ」と受け入れ、適応することを多くの人々が強いられた。

その少し歪な現状は、夕星のクラスメイト達からも伺える。

スピーカーから流れた放送の声通りに廊下に整列しながらも、「ラッキー。午後の授業が潰れる」程度にしか考えていない生徒が半分。

行きつけのショッピングモールや普段使っている駅が踏み潰されないか心配する生徒がもう半分。

そして夕星のような一部の生徒が、〈エクステンド〉がどのような奮闘を魅せてくれるかに期待している。

「それにさ不謹慎どうこうを言い出すのならなら、あの人はどうなんだよ？」

夕星は彼女をなるべく刺激しないよう注意しながらも、校庭の方を指差した。

そこに在るのは、拡声器を手にした女性教員の姿だ。

『——頑張れ〈エクステンド〉！ド派手なのをブチかましてやりなさいなッ！』

先程の夕星の姿がテレビの特撮番組に食い入る子供なら、ありったけの声援を届けようとする彼女の姿はさながらヒーローショーに盛り上がる司会のお姉さんのようであった。

見ようによっては夕星たち以上に不謹慎である。加えて彼女は今年で二十七なのだ。

そんな大人を、陽真里という生真面目な幼馴染が許すわけもない。両手を口元に添え、拡声器に負けないほどの大声を張る。

「何ふざけるんですか、未那月先生ッ！」

その声に養護教諭の、未那月美紀は「ビクン！」と肩を震わせた。

『あはは……そこに居るのは藤森委員長に神室くんではないか。放送にしたがって避難しなくてはダメだろうに！』

「今更、教師らしい振る舞いで誤魔化そうとしたって無駄ですからねッ！それに生徒の避難を促すのも貴女の仕事でしょう！」

『うぐっ……流石は謹厳実直な私の可愛い生徒だ。やはり小手先の口先三寸は通じぬか』

「とにかく早く戻って来て下さいッ！先生がクビになっても、私たちは知りませんからねッ！」

陽真里は溜息を今日一番の重苦しい溜息を吐き出した。

「うん……流石にあれば未那月先生が悪いし、ヒバチの気持ちも分かるかもな……」

夕星は自身のことを「まあまあの変わり者」だと認識しているし、お節介焼きの陽真里のことは「まあまあのお好き」だと思っている。

けれど、あの担任だけは「まあまあ」という言葉で収められる程度の変人ではなかった。昨年度から赴任してきた彼女が起こした問題は数知れず。愛車のシボレーカマロで校庭に突っ込むは、カツアゲされている生徒を助ける為に他校の不良をボコボコにするはで、一昔前の学園ドラマに出てくるヤンキー教師そのまんまである。

今日みたく拡声器を持ち出して〈エクステンド〉を応援するなんて奇行は可愛いもので、昨年度には廃部寸前だった演劇部と映像研を巻き込んで〈エクステンド〉を題材とした百二十分にも及ぶムービー映像を作成。それを何処かのコンクールに出した結果、最優秀賞を取ったらしいのだ。

けれど、そんな未那月先生の破天荒っぷりに魅せられてしまう生徒は多く。その美麗な容姿と相まって、特に男子生徒からは絶大な支持を得ているのが現状であった。

「けど、不思議だよな。PTAや教員委員会の目がやたらと厳しいこのご時世に、どうして未那月先生はお咎めなしなんだ？」

「そんなの私が知りたいくらいよ。理事長の孫娘だとか、実は学界でも指折りの天才だとか、色んな噂は飛び交ってるけど、どれも信憑性は定かじゃないし」

「ふーん……じゃあさ、〈エクステンド〉や怪獣を調査する為にやって来たどっかのエージェントだったり！」

「バカ。だったら、どうしてそんなエージェントが何の変哲もない私たちの学校に潜入して、変人養護教諭のフリをしているのよ？」

陽真里の正論を受けて、夕星も我に帰ってきた。確かに、今の仮説は自分でも「ないな……」⁷と思ってしまう。

そんなことを考えている間に、向こうでは〈エクステンド〉がザリガニ怪獣の触角をへし折っていた。

背面に備えられたブースターが蒼炎を吐き出して、振り上げられたハサミを回避。さらに流れるようなモーションで、鋼鉄の拳をねじ込んでみせる。

「あっ、」

きつと、それが決まり手になったのであろう。

頭を潰されたザリガニ怪獣は電池が切れたように動かなくなり、〈エクステンド〉もほんの数秒静止すると、空の彼方に飛び去ってしまった。

今回も自衛隊の調査チームが消えた〈エクステンド〉の行方を追うのだろうか、それも結局は徒労に終わってしまうのだろうか。

「今月はやけにあっさり勝ったな」

「五、六限も潰れねーじゃん」

なんて愚痴りながら廊下に出ていた生徒たちも教室へと戻って来た。

「はあ……あの〈エクステンド〉ってロボットは、どうして私たちの日常に現れたのかしら？」
そんな風に陽真里がうんざりするのも当然だった。

わざわざプラモデルを手に入れるほどのだから、当然夕星だって〈エクステンド〉の正体

に関して様々な仮説を立てた。

あの怪獣は地球侵略にやって来た宇宙人の尖兵で、〈エクステンド〉はそれに対抗すべく天才博士の作り上げた人類の叡智の結晶だとか。

遠い未来から人類滅亡を防ぐ為に送られて来たオーバーテクノロジーだとか。

果ては異世界や並行世界からやって来たのではとも考えたが、所詮はオタク少年の妄想の域を出ないのだ。

「別に何だって良いだろ。今回だって俺たちの街を護ってくれたんだし、カッコいいんだから、それで十分だ」

結局、謎は謎のまま。夕星にのつての凡庸な日常は、今日もまた過ぎてゆくのだった。

02

放課後。夕星はバスに揺られながら、隣町を目指していた。唯一の悪友から「遊びにいこうぜ」と誘いのメッセージが届いたのだ。

「集合場所はいつものゲーセンでいいよな? ……つと!」

そこまでのLINEを打ち終えた夕星は、前の車窓へと視線を移す。

前方を進むのは迷彩色を纏うトラックだ。さらに前方にも同じような車両が数段並んで、ちよつとした渋滞を作っていた。

三年前、初めて〈エクステンド〉が怪獣を倒した際に、残された死骸をどうするかが問題となった。二〇メートルを裕に超える巨大生物の死骸を放置出来るわけがない。さらには各国の研究機関がこぞって怪獣の死骸を欲しがり、外交問題一步手前の大騒ぎへと発展した。

しかし、その問題は意外な形で解決を迎えることになる。倒された怪獣の死骸が、何の変哲もない砂塵になったのだから。

当時の研究者たちはこぞって度肝を抜かれたことであろう。

「怪獣を構成していた筋繊維や骨格が、何の変哲もない砂塵になる訳がない」というのが研究者たちの総意であったが、事実としてその現象が起こったのだから、彼らも口を噤むことしか出来なかった。

これも〈エクステンド〉や怪獣の正体が謎のままである要因の一つであるが、それでも街に残された砂塵は、誰かが回収して処理しなくてはならない。

「多分、連中の行き先も隣町なんだろうな」

あのトラックは街に降り積もった砂塵を、然るべき機関へと運ぶためのものだった。もっとも最近では回収した砂塵を保管するスペースが足りなくなつて、海洋の埋め立てなんかに使つていふという噂なのだが……

『悪い。ちよつと遅れるかもしれねえ』

そうLINEを打てば、スタンブ画像と共に「了解」という簡素な返信が届いた。

まあ、アイツのことだ。数十分くらいの時間は適当に潰すのであろう。

夕星はLINEを閉じて、各種SNSを開いた。そこで〈エクステンド〉と検索ワードを入れたのなら、昼間のザリガニ怪獣との奮闘を撮影した写真が山のようにヒットした。

中には、間近のローアングルで撮ったと思われるものや、機体各所のメンテナンスハッチや装甲同士の継ぎ目が見えるようなものまであった。

「やっぱり大きなメカは下から煽るように撮るのが、一番映えるよな♪」

いつもは「不謹慎!」とお説教をしてくる幼馴染様も、今日は委員総会らしく学校に残ったままだ。つまり、今の夕星を邪魔するものは誰もいない。

お気に入りの画像をダウンロードし終えた夕星は、ルンルン気分で鼻歌を奏でるのであった。特に気に入ったものはプリントアウトして、完成した一〇〇〇〈エクステンド〉のプラモデルと一緒に飾るのも良いだろう。

そんなことを考えている間にも、少しずつ渋滞の列が緩和し始めた。



トラック群は別ルートを使うようで、渋滞を抜け出たバスは間も無くして、駅前へと停車する。

そこから歩いて四、五分程度。夕星は行き付けのゲームセンターにたどり着いた。

自動ドアを潜れば、店内の忙しい喧騒が夕星の心を踊らせる。そして、ざっと店内を見和せば、一際目立つスペースに設置された筐体の前で、忙しくレバーとボタンを操作する男子生徒の姿を見つけた。

「おっ、やっぱりここにいたな」

夕星の羽織る学校指定の黒ジャケットとは真反対の白学ランは、進学校で知られる明王高みょうおう校のものだ。けれど夕星は物怖じすることもなく、彼のゲーム画面を覗き込む。

画面の中で派手なエフェクトと共に映し出されるのは、〈エクステンド〉と怪獣の姿だ。

これは〈エクステンド〉を題材にリリースされた格闘ゲームなのだから、画面に〈エクステンド〉や怪獣が映ること自体に不思議はない。が、プレイヤーを示すカーソルには違和感があった。

矢印が怪獣の方を指しているのだ。

しかも白学ランの生徒が次々にコマンドを打ち込めば、NPCが操作しているであろう〈エクステンド〉のHPGヒットポイントゲージがガリガリと削られてゆく。

「ああ、バカ! そんなことしたら、〈エクステンド〉が……」

夕星が発した悲痛な声も画面の中にも届かず、〈エクステンド〉が爆発のエフェクトと共に轟沈した。

画面にデカデカと表示されるのは「YOU WIN」の文字。それを見届けた白学ランの生徒が得意げな笑みを浮かべて振り返る。

「見たかい、夕星？ この俺の華麗なスーパープレイを」

彼は鳥居十悟^{とりいじゅうご}。夕星の中学からの悪友であった。

オールバックに掻き上げられた髪と、猛禽のように鋭い瞳は相変わらず他者へ相応の威圧感を与えるものだ。けれども、十悟の浮かべる人懐っこい笑みは、それすらも帳消しにしてしまふ。

寧ろ、爽やかなイケメンに見えてしまうのが若干ムカつくくらいだ。

「特に最後の決め技のコンボ。これを決めるために毎日一時間練習したのさ」

進学校の生徒が勉強や部活に精を出さず、放課後ゲーセンに通い詰めるのはどうかと思うが、十悟は昔からこういう奴なのだ。

自頭がいいからテストで困ったなんて、経験をしたこともないのだろう。

「あーもう、わかったから！」

ウザ絡みしてくる悪友を押し退けながら、夕星は向かいの筐体へと腰かけた。そして五〇〇円玉を挿入すると真っ先に「エクステンド」を操作キャラに設定し、対人モードを選択した。

「おっ、いきなりか？」

「こっちは大好きな「エクステンド」が一方的に倒されるところを見せられたんだ。一人のオタクとして黙ってられるかよ」

「ああ、なるほど。けど、それはあまり賢い選択とは言えないな」

「んだよ……？」

「NPCが操作する推しが俺に負けるより、自分で操作した推しが俺に負ける方がショックも大きいだろうと思ってるさ」

十悟も操作キャラのカブトムシ怪獣を選択した。

投げ技を主体に設定されたカブトムシ怪獣は、遠距離も対応したバランスタイプの「エクステンド」に対して不利となる。

きつと十悟なりの挑発なのだろう。

「上等だ。その喧嘩買ってやる！」

夕星の交友関係は限りなく狭く、その原因は中学時代に連んでいた不良仲間の殆どと縁を切ったせいであった。

縁を切った連中の中には、葉に手を出したというウワサがある奴や、少年院に入ったという奴までいるのだから、その選択自体に後悔はない。

けれど、十悟とだけは唯一、縁を切ろうと思えなかったのだ。

「ほらほら、ガードが甘いんじゃないか？」

「クソ！ キャラ相性なら「エクステンド」の方が有利だったのに！」

十悟は中学の頃から、成績も運動神経もズバ抜けていた。

絶対に口に出すつもりはないが、そんな姿に憧れてしまうのも必然であっただろう。
「このッ！」

そんな友人にゲームでくらい勝ちたいと思うのも、また必然であった。

画面の中の〈エクステンド〉はかなりダメージを食らったが、お陰で必殺技のゲージが溜まっていた。賭けに出るのなら一瞬だ。

「なあ、十悟。お前の学校でも教えてもらえないことを一つ教えてやるよ」

夕星は素早く筐体のレバーを弾き、必殺技と、そこから繋がるコンボのコマンドを挿入した。
「勝負事はいつだって、ビビったら負けなんだよッ！」

筐体のスピーカーが一際に大きな打撃音を吐き出して、カブトムシ怪獣が画面の向こうまで吹っ飛んだ。〈エクステンド〉の連撃からのアップercutが炸裂したのだ。

「よっしゃ！ 見たかよ、これが〈エクステンド〉の本気だ！」

「マジか……ははっ、これは手痛いなあ。けど、勝負は三ラウンド制、まだまだ喜ぶのは早いんじゃないか？」

十悟はほんの一瞬目を丸くするも、すぐに余裕を取り戻して見せた。

「フン、だったら速攻で二ラウンド目も取らせてもらうだけだ！」

大丈夫。次のラウンドも同じようにコンボを繋げれば、カブトムシ怪獣に大ダメージが与えられる。

夕星は勝機を確信していた。それでいて焦ってはいけないと、早まる気持ちを律してみせる。けれど、十悟は不意に思わぬことを聞いてきた。

「ところでさ。夕星はやっぱり幼馴染の陽真里ちゃん派かい？ それとも養護教諭の未那月先生派？」

「ブツツ———!？」

全く予想外な角度からの質問に、夕星は嘖き出してしまった。

「なっ、何だよ、いきなり！」

「だから、陽真里ちゃんと未那月先生のどっちがタイプかを聞いてるんだよ。二人は天川高校の二大美人ってことで、以外と有名なんだよ。未那月先生に至ってはうちの高校にもファンクラブがあるほどさ」

昼間のように、普段から未那月先生の奇行を見せられている夕星からすれば、ファンクラブを作る連中の気が知れなかった。

それに気になるのは、寧ろ———

「ちなみに俺は陽真里ちゃん派かな。中学の頃は同じ生徒会の役員同士だったわけだし」

「はあ!？」

そういえばそうだったと思いつく。当時の十悟は不良であったにも関わらず、女子生徒からの多くの得票率を確立し、生徒会長の地位に登り詰めたことがあったのだ。

ちなみに陽真里は「十悟のアホを一人にしたら何をしでかすか分からん」との理由で、教師たちから半ば強制的に生徒会副会長の地位に押し上げられていた。

「なあ、夕星。幼馴染の君が良いって言うのなら、俺様が陽真里ちゃんをデートに誘っても良いよな？」

「なっ、なんで、そこで俺の許可がいるんだよ！ 大体、わっかんねーな！ ヒバチみたいな口煩いだけの女のどこが良いんだか？」

けれど、陽真里の横に十悟が並ぶ姿を想像して。それが何故だか、妙に面白くなかったのだ。「はい、隙あり！」

そんなことを考えていたからであろう。画面の中の〈エクステンド〉の動きが止まっていた。当然、そんなチャンスを十悟が見逃すわけもなく。二ラウンド目は彼にあっさり奪われてしまふのだった。

画面に大きく表示される「YOU LOOSE」が尚のこと哀愁を際立たせる。

「十悟ッ！ 俺を動揺させようとワザと変な質問をしやがったなッ！」

「それは言い掛かりじゃないか？ プレイヤー同士の駆け引きも、ゲームの醍醐味のだろ？」

向かいの筐体から顔を覗かせた十悟はニンマリとほくそ笑んでいた。

先程は人懐っこい笑みと評したが、訂正しよう。見る人間の神経を逆撫でする悪辣な笑顔だ。

「よし、わかった。テメエを絶対泣かしてやる」

そう決意した夕星が再び、力強く握ろうとした瞬間だ。

今日で『三度目』となろう轟音が空を裂いて、鼓膜の奥を震わせた。画面の外で、本物の

〈エクステンド〉が再び、飛来したのだ。

03

〈エクステンド〉と怪獣が現れるのは一か月に一度だけ。だから、その空を裂くような轟音が

響き渡るのも、両者が来訪する時だけで。本来は『三度目』の轟音など鳴り響くわけがなかつ

た――



ゲームセンターから飛び出した、夕星はその圧倒的スケールを目撃することになった。

何本かの道路を跨いだ先に〈エクステンド〉が着地する。脚部装甲から露出した緩衝器が

伸縮。背中に集約した排熱口からは熱を帯びた白煙を吐き戻す。

きつと機体内部へと籠ってしまった熱を、逃がしているのだろうか。

「すげえ……すげえ！」

これほどまで間近で、〈エクステンド〉を見るのは初めてだ。

二五メートルを超えた鉄の巨人は辺りに暗い影を落とし、ローアングルから見上げることになった夕星は高揚を抑えきれなかった。

機体のパーツ一つ一つから細部の塗装剥げに至るまで、〈エクステンド〉の全てを脳裏に焼き付けようと、瞳を凝らす。

「ばか、何してるんだよ!？」

少し遅れて、十悟もゲームセンターから飛び出してきた。

「何って、〈エクステンド〉がこんなにすぐ傍で見れるんだぜ! こんなチャンス滅多にねえだろ!」

「はあ……どうやらお前は筋金入りの〈エクステンド〉オタクらしいな。けど考えてもみろよ、〈エクステンド〉が来たってことは、次は何が来るかを」

そう、〈エクステンド〉が飛来したからには、それと対峙する存在が現れるのが常だ。

向かいの空からは本日四度目となる轟音が迫り、〈エクステンド〉の正面に着地。相も変わらずビル群を薙ぎ倒しながら、粉塵を舞い上げるようにして現れた。

当然、二人の視線もその姿へと。粉塵が晴れて、次第に露へとなくなっていく怪獣の姿へと集約される。

だが、その怪獣には違和感があった。

「ちよつと待て……あの怪獣、何かおかしくないか？」

十伍の言葉通り、その怪獣の様相は、これまで〈エクステンド〉に倒されてきた他の有象無象たちとは何かが違う。

昼間現れたザリガニ怪獣のように、今日まで現れてきた怪獣たちは何らかの生物をそのまま巨大させたかのような存在であった。

対して、今現れた怪獣はどうであろうか？

シルエットこそアスリート然とした男性らしいものだった。けれど、その全身はゴムのような質感の皮膚に覆われるだけで、甲殻や装飾らしいものは何もない。

のっぺりとした頭部には幾何学模様のラインが走るだけで、それは異質な不気味さを醸し出す。

「うーん……たしかにちよつと変かもしれないけど、〈エクステンド〉はあんな奴に負けねえよ。いつもみたいなのに、こう、バーン! って感じで勝つに決まってる!」

「そうだといいただけどな……とにかく、あの二体にここまで近いのは危なすぎる。どこかのシエルターに身を隠すぞ」

十伍は急かすように、夕星のジャケット袖を引いた。

だが、その判断はわずかに遅い。——向こうで〈エクステンド〉と得体の知れない怪獣が激しく掴み合いを始めたのだから。

互いの巨体が全力でぶつかり合った間には相応の衝撃が生じた。その余波は辺りの瓦礫や、

乗り捨てられた車両を軽々と跳ね上げ、夕星たちの小さな体さえも弄ぶ。

「やべっ！」

二人の小さな体は衝撃によって、宙へと舞い上げられてしまったのだ。

夕星は咄嗟に額を庇うも、すぐに重力に引かれて、間近にはアスファルトが迫ってきた。

次いで自分を襲うのは衝撃と鈍痛だ。こんな痛みを味わったのは、中学の頃、親のバイクを無断で借りた挙句にノーヘルノー免で転倒させたとき以来であろうか？

「ツツ……痛ってえな」

それでも切れた額の血を拭い、砂埃の向こうで十悟の姿を探す。

「おい……十悟ッ！ 大丈夫か！」

「ギリギリ！ 運がよかったみたいだね」

その白い学ランには汚れ一つない。きつと、あの土壇場で華麗に受け身を取ったのであろう。自分が思い切り頭を打ちつけたというのに、この悪友は本当になんというか……

「下手に動き回るのは危険だ」と、無言で顔を見合わせて、夕星たちはその認識を共有する。

周囲に落下の恐れがある看板や、千切れる恐れのある電線がないことを確認した二人は手頃な建物の物陰へと身を滑り込ませた。

「悪いけど夕星……俺はしばらく〈エクステンド〉のことも嫌いなりそうだよ」

「なら、掌を返す準備をしておくんだな。〈エクステンド〉がああ怪獣をブチのめす瞬間に備えて」

嵐が過ぎ去るのをじっと待つように、二人はこのまま事態の収束までやり過ごすつもりだった。

だが、それは〈エクステンド〉が怪獣に勝利すると言う前提の防衛策でもあった。現に夕星は、〈エクステンド〉の勝利に何の疑いも持っていない。

これまでの日常がそうであったのだから――

不意に向こうで怪獣が構えを取った。上腕で腰から上をガードし、小刻みなステップを踏むために爪先を上げたのだ。

その立ち姿はまさしく、ボクシング。怪獣の振る舞いもボクサー然としたものに豹変する。

何もない剥き出しの拳にはグローブが嵌められているじゃないかと錯覚する程に、その型は胴に入ったものでもあった。

「けど、なんで？」 夕星たちがそんな疑問を口にするよりも早く、怪獣はショートジャンプの連打を繰り返す。

「野郎ッ……だけど残念だったな！ 〈エクステンド〉の全身を覆う装甲は単純な打撃程度、効きやしねえんだよ！」

現に夕星の言葉通り、〈エクステンド〉は拳の雨に晒されながらも、腰を落としながらにカウンターを狙っていた。

「行っけえ、〈エクステンド〉！ ラッシュが途切れた瞬間がチャンスだ！」

「いや……ちよっと待つんだ夕星」

一発目の拳を打ち込んだ時点で、あの怪獣も〈エクステンド〉の頑強さや打撃の危機の悪さに気づくチャンスはあったはずだ。

それでも尚、拳を撃ち続けるのは、あの怪獣がボクシングしか出来ないからなのか？

「あの怪獣は他の怪獣とは何かが違う……俺にはアイツが何かを狙っているように思えてならないんだよ」

そんな十伍の予感が、次の瞬間に的中した。怪獣がまた構えを変えたのだ。〈エクステンド〉が渾身のカウンターを放つために無防備にならざるを得ないその一瞬を狙って。

ボクシングの構えがスピードと連撃をウリにしているのなら、その構えは先ほどと真逆。足裏を地面にベタで接し、腰の捻りから繰り出されたその張り手は中国拳法で言う「発勁」である。

「なっ……!?!」

〈エクステンド〉の腹部を覆う装甲が、火花と共に剥離する。

まるでガラス細工を砕くように。機体を支えるフレームが断裂、引きちぎれたコードや機体を巡る液状燃費がまるで臓物の用に飛び散った。

脇腹を抉られた〈エクステンド〉が膝を着こうと、怪獣の勢いは止まらない。寧ろこの千載一遇のチャンスに、その本能が昂るのである。

もう一撃、打ち出された発勁は〈エクステンド〉の頭部を精密に捉えていた。

その衝撃に弾かれた頭部は空中に山なりの弧を描き、やがて夕星たちのすぐ側へと降ってきた。

「危ないッ！」

咄嗟に十悟に腕を引かれる。今、彼が腕を引いてくれなければ、夕星は飛んできた〈エクステンド〉の生首の下敷きになっていただろう。

「……………う、嘘だよな」

落下したそれは最早、頭部とわからぬ程に大破していた。装甲板が怪獣の掌型に凹み、翡翠色をしたカメラアイは数度明滅するも、そのまま彩度を失ってしまう。

今、この瞬間。数多の怪獣を倒し続けてきた〈エクステンド〉が、初めて怪獣に敗北したのだ。

04

「誰かが怪獣をデザインしているのではないか？」という説が持ち上がったことがある。

今から三年前、〈エクステンド〉と共に初めて現れた怪獣はトカゲをそのままスケールアップしたような個体ながらも、その体格は二〇メートル前後と、最近の怪獣と比較して一回り小さな姿をしていた。

だが、その次に現れた怪獣は二メートル前後とやや巨大化し、二二、二三とその身体を大きくしていった。

そして、カブトムシ怪獣が現れた時期を皮切りに、怪獣は強固な甲殻を纏うようになり、〈エクステンド〉の装甲にも劣らない強固な防御力を獲得したのだ。

怪獣を倒すと、次はもっと強い怪獣が現れる。だから、そこに何らかの意思があるのではないか？ と考察する層が出るのも解る。けれど、この説も所詮はネット上で盛り上がった仮説に過ぎず、その信憑性もオカルト的な考察や、誰かの陰謀論程度のものであった。

結局、謎は謎のまま。

一ヶ月に一度、現れた怪獣を〈エクステンド〉が倒していく。そんな日常が今日も過ぎゆく筈であった。

だが、誰かが本当に怪獣をデザインしているのなら。

そのデザイナーはこう考えたのではなからうか？

重い甲殻を纏ったところで、結局〈エクステンド〉に砕かれてしまうのならば。いっそ、ウエイトを脱ぎ捨ててより「闘う」ことに特化した創造をするのはどうかと。

そんな願望の果てに産まれた怪獣が、あの得体の知れない怪獣だったとしたら――



夕星は目の前の現実^{ゆっせい}に絶句する。その視線の先にあるのは、ただの鉄屑と化した〈エクステンド〉の残骸だ。

ひしゃげた装甲の隙間から滴るオイルはドス黒い血液のようで、それは壊れた機械というよりも、死に絶えた生物を思わせるグロテスクさを内包する。

「……………」

その鉄屑に手を伸ばすも、〈エクステンド〉は夕星の指先が触れた途端、きめ細やかな砂塵と化して崩れてゆく。

残されるのは、山形になった砂だけだ。

そして、頭部と同調するように、向こうで残された首から下のボディもまた砂塵となって消えてしまう。

「な……………なんで」

夕星の理解は追いつかなかった。

倒された怪獣の死骸が砂塵となって崩れていくのは、原理が解らなくとも納得できる。きつと怪獣だけが持つ「未知の体組織がどうたら、こうたらで、」と頭の中でそれらしい仮説を立てられるからだ。

だが、〈エクステンド〉は明らかな人工物だ。最先端のテクノロジーの集合体とも言える人

型マシンがどうして怪獣と同じように砂塵と化して消えてしまうのか？

そもそも夕星には、「〈エクステンド〉が怪獣に敗北した」という事実自体を受け入れられずにいた。

足元の砂塵を掴むも、それは夕星の指先からサラサラと滑り落ちてゆく。

それはまるで、自分の中にあった〈エクステンド〉への好感や信頼が喪失するようでもあった。

「おい、夕星！ しっかりするんだ！」

十悟じゅうごが激しく肩を揺さぶった。それで、夕星もようやくと我に帰る。

「悪いが、今はショックに暮れてる場合でもなさそうだ……見ろよ、アイツの方を」

〈エクステンド〉を倒したあの怪獣は、次なる標的を目の前に聳えるビルへと移したらしい。

腰を入れて踏み込むようにして放ったのは、空手の「突き」だ。

ボクシングや中国武術のみならず、日本の空手まで会得しているとは。ビルの窓には亀裂が走り、拳との衝突部に生じたクレーターからへし折れてゆく。

「俺たちも想像しなくちゃいけないのかもな……〈エクステンド〉が負けた後のことを」
そうだ。

夕星はイメージする。これまで勝ち続けてきた〈エクステンド〉が負けてしまったあとの日常がどうなるかを。

あの怪獣は破壊の限りを尽くすのであろうか。それともどこかの誰かがミサイルや戦闘機であの怪獣を撃ち倒してくれるのか。

どう思考を巡らせたって、夕星のイメージが辿り着くのは廃墟となった街と、犠牲となった人々の山であった。

今更ながらに陽真里ひまりの警告を思い出す。「〈エクステンド〉と怪獣の闘いを楽しむのは不謹慎である」と。

きっと自分は幼稚で、彼女は真つ当だったのだろう。そんな時、不意に怪獣が動きを止めた。両腕をダラリと下げたまま沈黙する。

もしかしたら街を壊すのに飽きて、このまま空に帰ってくれるのでは、と淡い希望を抱くのも束の間であった。

怪獣の顔が横に裂け始めたのだ。そこから覗くのは鋭利な牙と、テラテラと粘液質な輝きを放つ舌。

「フッ……フッ……」

怪獣が口を開けたのだ。そして、音を詰まらせながらも何か言葉を紡ごうとする。

「フジジ……フジジ……モリ」

口が縦へ、横へと形を変えて。

「フジモリッ……ヒッ……ヒマリ……」

フジモリヒマリ。——そのワードは夕星の中ですぐさま「藤森陽真里」の名へと変換される。

「アイツ今、陽真里ちゃんの名前を呼んだよな？ けど、どうして……って夕星!？」
今度は思考を巡らせるよりも速く、身体が動いていた。

それはほとんど条件反射のように。夕星は弾かれた弾丸の如く、走り出す。

「ッッ！」

だが、虚しいかな。沈黙した怪獣が再び歩き出せば、その振動で足元が揺れ、夕星は派手に転ばされた。

怪獣はそのまま、向こうへと。夕星たちの通う天川高校あまのがわへと進路をとった。

たしか陽真里は、委員総会で今頃も学校に残っている筈だ。だとしたら、あの怪獣は何らかの器官を用いて陽真里の居場所を補足しているのではないだろうか。

直観はほとんど確信へと変わった。

「クソッ……十悟、この辺りに駐輪場はないのか！ このまま走っても、野郎にはとてもじゃねえが追いつけない！」

「いや、何言ってるんだ!？」

「だから駐輪場はなかったか聞いてるんだよ！ 緊急時なんだ、前科が付くのも構うもんか。とにかく自転車でもバイクでも盗めるもんを盗んでヒバチを助けに行くんだッ！」

「夕星、少しは頭を冷やすんだ……仮に都合よく自転車やバイクを盗めたって、それであるの巨体の歩行速度に追いつけと思うか？」

「それでもッ！ あの怪獣はハッキリとヒバチの名前を呼んだんだ！ それに何故かアイツにはヒバチの居場所もバレてるんだぞ！」

既に夕星の頭の中を埋めるのは、藤森陽真里のことだけだ。彼女を助けに行かなければ。——そんな想いだけが先走る。

「じゃあ、夕星。俺もハッキリ言わせて貰うが、お前は陽真里ちゃんの元に駆けつけたとして、それが何になるんだよッ！ どうにもならないことくらい少し考えれば解るだろうがッ！」

十悟のぶつけたてきたそれは、どうしようもないくらい正しいの正論である。

相手は鉄の巨人も、無数のビル群をも容易く壊してみせる怪獣。

対する自分は中学の頃に多少荒れていた程度で、ミーハーなオタク趣味を持つだけの高校生だ。

スケールも何もかもが違いすぎる。

「それとも、お前には何かあの怪獣を倒す作戦があるのか？」

「それは……」

そんな作戦が思いつけるのであれば、既に行動に移している。何も思いつけないからこそ、こうやって言葉に詰まっているのだ。

「もしも、あの怪獣を倒せるだけの力が自分にあったなら」と、そんな願いが頭の片隅をよぎった。

「あの怪獣の脅威から陽真里を守れるのなら、自分はもうなっていない」と、そんな願いを胸のうちで強く抱きしめる。

——けれど、「願うこと」は所詮「願うこと」に過ぎない。

「畜生ッ！」

夕星は募る苛立ちを吐き捨てようとして、ふと自分の足元に少量の砂塵が付着していることに気づかされた。

〈エクステンド〉を形作っていた、あの砂塵だ。

初めは転んだ拍子にくっついて来たのかと思った。だが、それも違うということにすぐに気が付かされる。

無数の砂塵は夕星の足元を伝い、気づけばずっと背負ったままになっていた鞆へと集まっていく。

「おい、夕星……それって」

十悟も異変に気付いたようだ。そして次の瞬間には、鞆から何かが飛び出していた。

鞆へと集まっていた砂塵も、宙へと飛び出したそれに続く。

さらに向こうの路地からは〈エクステンド〉の首から下を形作っていたであろう砂塵の波が押し寄せて、それを中核に何かを形作っていった。

夕星には、その正体がすぐにわかった。砂塵の中核は、自分が寝る間も惜しんで作り上げ

た^{百分の一}／一〇〇スケールのプラモデルであると。

やがて、寄り集まった砂塵はヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群を完成させる。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「〈エクステンド〉」

夕星の声に応えるよう、鉄の巨人は今再び地面に立ち上がる。

05

夕星^{ゆうせい}のプラモデルを中核に再構成された〈エクステンド〉には傷一つない。金属的な鈍い輝きを放つ全身の装甲は、それが砂塵で出来ていると思えない程であった。

「嘘だろ……〈エクステンド〉が蘇ったのか……」

十悟はその光景に、理解が追いつかないという顔で絶句する。

理解が追いついていないのは夕星も同様であった。ただ、それと同時に妙な納得感もあった。まるで、こうなることが予め決められた確定事項のような気がしてならないのだ。

そんな気付きを得ると同時に〈エクステンド〉の巨体が跳き、マニピュレーター 掌 の先を夕星へと差し出した。

さらに頭部を覆う装甲が展開。まるで大きく口を開くようにして、その内側を露わとする。

「まさか、お前……」

そこに在ったのはちょうど人が一人収まりそうなシートと、一對の操縦桿だ。空の操縦席を曝け出した〈エクステンド〉はただ鎮座して、己が主を静かに待ち望む。

「……俺に『乗れ』って言いたいのか？」
上等だ。

夕星は神や、増して奇跡など信じない質だ。——ただ、今は奇跡だろうと何だろうと構いやしない。「あの怪獣を倒せるだけの力が欲しい」と願い、その結果与えられた力が〈エクステンド〉だというのなら、躊躇う理由もなかった。

「待つんだ、夕星！」

歩み出そうとする夕星の腕を、十悟が掴む。

「〈エクステンド〉はさつき負けたばかりじゃないか！ それに陽真里ちゃんだって馬鹿じゃない。仮に学校に残っていたとしても、あの怪獣が来ることを知れば、すぐに避難するはずだろ！」

例え、困惑の中にあろうとも、十悟の主張は最後まで正論であった。

夕星の周りの「頭のいい奴」は揃いも揃って、正論を振りかざす。それはきつと自分以上に周りが見えているからであろう。

だが、今回ばかりは夕星も譲る気がなかった。

陽真里を狙う怪獣はこれまでの怪獣と何もかもが違っているのだ。だから、どんな脅威が彼女に降りかかったとしても、おかしくはない。

「悪いな十悟。俺はヒバチが……いや、陽真里が傷付く可能性があるのなら、例えそれが一パーセントにも満たない確率であろうとも、それを許容することができないんだ」

「なんだよ、それ……。確かに俺だって陽真里ちゃんのことには心配だ。幼馴染であるお前が、彼女に対して特別な感情を持つることだって知っている。ただ、さつきから聞いてれば、陽真里ちゃん、陽真里ちゃんって熱くなり過ぎなんだよッ！」

十悟の瞳がキツク眇められた。

けれど、その瞳に込められた思いは、敵意や苛立ちではなく、自分へと向けられた不安と心配であった。

彼は夕星の襟首を掴み上げ、強く揺する。まるでどこかおかしくなってしまった自分を正気へと戻そうとしているようでもある。

「悪い、十悟」

だが、夕星はその腕を払い除けた。

「俺にとって陽真里はただの幼馴染じゃねえんだ。増して、『好き』とか『嫌い』とか、そんなチープな言葉で表せるほど、俺の内心は安くねえんだよ」



思い出されるのは、過去の記憶だ――

中学が上がって間もない頃、夕星の両親は揃って蒸発した。どうせ、しょうもない理由なのだから、二人が自分を捨てたワケなんて知らないし、知りたくもなかった。

それでも当時は多感な時期だ。夕星の中学生活が荒れ果てることもある種の必然であった。手当たり次第に、詰まらないことをしている連中を殴り倒して、憂さ晴らしに勤める。いかにもガラの悪そうな上級生や、愚連隊まがいな高校生たちと正面を切って喧嘩をしたのだから一度や二度じゃない。

無論、そんな日々を送っていたら絆創膏や生傷と共に、自分へ向けられる冷ややかな視線と偏見ばかりが増えていく。

いや……あれは偏見などではなく、他者の認識する「神室夕星」という人物像そのものであったのであろう。

だが、彼女だけは――藤森陽真里ふじもりだけは、自分にしつこく付き纏うことを止めようとしなかった。

何度拒絶しようとも、「幼馴染だから」という詰まらない理由だけで、彼女は傷の手当てをしてくれたのだ。

ロクに授業に出ようとしなかった自分に、勉強を教えてくださいました。進路について諭されたのだから、一度や二度ではない。

「夕星はもう少し日常を好きになった方がよいよ。世界はフィクションとノンフィクションに溢れてるんだから。辛いなら、フィクションに逃げたって良い」

「子供みたいに幼稚な願い事や幻想を抱いたって、目の前のノンフィクションに押しつぶされるよりはマシなんだから」と。

そんな風なお説教を、何度も食らったことを覚えている。

そして、また少しずつ時間が過ぎていって。中学を卒業するくらいの頃には、喧嘩の傷が

顔から綺麗に消えていた。

どこで道を間違えたのか、オタク趣味に目覚め、お金の使い道について叱られることも増えたが、それで良かったと思う。

少なくとも今の自分は中学の頃自分とは違う。

彼女の言う通り、何処にでもあるような日常を心の底から楽しむことができたのだから。



「きつと陽真里がいなくちゃ、俺は両親以上に無責任な大人になってたと思うんだ。だから、寸でのところで俺を引き止めてくれたアイツには、返しきれないくらいの恩がある」
だから、彼女を助けたいんだ。

「泥沼の底にいた自分を彼女が救ってくれたように、今度は自分が彼女を救わなければならぬ」という、ただそれだけのシンプルな理由が、夕星の手足を動かす原動力となり得た。

トルクを上げたエンジンのように火照ってゆく気持ちも、鋼のように固い覚悟もすべては彼女がいるからだ。

「そうかい……陽真里ちゃんがお前に求めている想いは、そんな呪縛みたいな恩義じゃなくて、もつと単純明快なものだと思っただけだな」

夕星には、そこに込められた真意を読み解くことが出来なかった。

ただ、十悟もこれ以上、自分を止めようとしな。その代わり、握った拳を差し出して、

「分かった、お前の好きにすれば良いさ。〈エクステンド〉に乗って、あの怪獣を殴り倒すのも、陽真里ちゃんを助けるのも、好きにすれば良い。——ただ、一つ条件を付けさせてくれ」

「条件？」

「ちゃんと、勝って戻ってくるんだ。格ゲーの決着ついてないだろ？」

そういえば、お互い一ラウンドを取ったまま決着がついていなかった。それを言うのは今じゃないだろうに、本当にこの悪友は、

「お前な……」

ただ、おかげで張り詰めていた気持ちも解れた。

「いいや、そうだな。俺の操る〈エクステンド〉が怪獣なんかに負けるわけがねーだろ！」

夕星も同じようにして拳を差し出す。

そこで交わしたフィスト・バンプからは、小気味の良い音が鳴った。



ゆっくりと装甲が降りてきて、夕星を収めたコックピットは静かに閉ざされる。

ほんの一瞬視界が暗闇に包まれるも、すぐにシート背部から顔の半分を覆うようなヘッドセ

ツトが現れ、額へと装着された。

これを介して、外の光景を窺い知るのであろう。

「ロボットものでよくある網膜投影とか、視神経のリンクみたいな奴なんだろうな」
夕星の視界に映し出されるのは、外の景色だけじゃない。機体の電圧や油圧など、様々な数値を示すパラメータが投影された。

複雑な数値の羅列ばかりが視界を埋め尽くしていく。

だが、夕星には何故かその意味が理解できるのだ。

「まさか……戦い方を教えてくれているのか？」

操縦桿をどのように倒して、足元の踏板をどう蹴れば、機体がどのような挙動をするかに至るまでの必要な情報の全てが、ヘッドセットを通して脳内に流れ込んでくる。

それどころか、すこし懐かしい感じまで……

「電圧チェック。油圧チェック。」

コックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと入れていく。その動作に一切の逡巡はない。

「エンジン回転数・正常。関節機構ロック解除。多次元解釈センサーをアクティブモードへと

移行———さあ、いこうぜ〈エクステンド〉ッ！」

推進機スラスターが流れ星のような尾を引いて、機体は加速して行く。

きつと普段の夕星ゆうせいならば、沸き立つ歓喜を抑えきれなかったのだろう。なんたって、あの

〈エクステンド〉に乗っているのだから。

憧れの存在に登場し、街を守る。そんな空想を脳内で思い浮かべては高揚感に浸っていた。

「こんなシチュエーションを望んでったけな」

だが、そんな脳内のフィクションは今、現実のノンフィクションへと成り果てた。

ゲームセンターの格ゲーで、〈エクステンド〉を動かすのとは訳が違う。

操作レバーとボタンの代わりに握り締めた一對の操縦桿は相応に重く、足を掛けた踏キックペダル板からはエンジンの微細な振動が伝わってくる。こんなにリアル、楽しむことなんてできやしない。

「……待っていやがれ、クソ怪獣」

眇められた夕星の双眸は、レーダに映る怪獣の反応だけをキツク睨んでいた。

「ヒバチには指一本触れさせねえよッ！」

先走る苛立ちに応えるよう、翡翠に明滅するカメラアイが黒く巨大な人型を捉える。一度は

〈エクステンド〉を大破させた、あの怪獣へと追いついたのだ。

操縦桿を前に押し込めば、推進剤を焚いて、機体はさらに加速する。その反動に息が詰まるも、〈エクステンド〉は握り締めた鉄拳は前に突き出した。

「さあ、リベンジマッチと行こうじゃねえかッ！」

大振りで軌道も丸わがりの喧嘩パンチは、さぞ避けやすかったことであろう。

怪獣は半身を引いて、素人丸出しの拳を躲してみせる——それが夕星のフェイントだとも気付かずに。

「はっ！ 悪いが、卑怯なんて言わせねえぞ」

〈エクステンド〉が素早く、右腰へと懸架された突撃機銃を引き抜いた。

「ブチ抜いてやるッ！」

咄嗟に回避行動を取った怪獣の正面はガラ空だ。

夕星がトリガースイッチを引き絞れば、怪獣の首元へと突きつけられた銃口が無数の弾丸を蹴り出した。

マズルフラッシュ
発火炎が瞳を焼かれ、銃声に鼓膜の奥を噛み切られようとも、指先を緩めるつもりはない。

開いた口で今も尚、「フジモリヒマリ」と反芻し続けるコイツを黙らせるためならば——

「ハア……！ ハア……！」

ヘッドセットには「警告」の文字と共に弾を撃ち尽くしたことが表示された。

少なくとも百発以上の砲火に晒してやったのだ。分厚い甲殻を持たない怪獣では耐え切ることも出来ないであろう。

だが、夕星は爆煙の向こうで奴が嗤っているような気配を感じた。それと同時に、こちらへ向けて「発勁」が突き出される。

「マジかよッ!?!」

確か、中学の頃。コンビニで格闘技を題材とした漫画を読みながらに十悟じゅうごが「中華武術における発勁は、ただの打撃や張り手とは訳が違う」と解説してくれたことを思い出す。

曰く、発勁の威力には、力の大きさと、それが作用した時間の積が深く関わるらしい。

プロボクサーの打撃の特徴が「鋭さ」と「速さ」にあるのなら、対して発勁は「重く」そして、力が加わる時間も「長い」。

その力積が結果として、鋼の装甲をも打ち破る衝撃を生むのだ。

「このッ……！」

既に怪獣の掌底は寸前まで迫っている。この間合いに入られては回避することも不可能だ。ならば、と夕星は機体の腰を抜き、〈エクステンド〉の巨体を跪つかせた。

「うぐっ……！」

噛みつくような打撃に右肩を抉られたが、地面への設置面が増えたおかげで作用する力を足

元に逃がせた。

だが、弾けて咲いた火花と共に、肩部の装甲を抉り抜かれた。機体内部にもダメージが生じたようで、握りしめていた機関銃が掌からこぼれ落ちる。

「クッ……」

今ので電送系を持っていかれたのだろう。だらりと垂れ下がってしまった腕はそのまま動かなくなる。

「……致命傷を避けたとはいえ、片腕一本ってのは割に合わねーよな」

一方で、機銃の一斉照射に晒された怪獣はどうなったのか？

恐る恐る視線を上げた先にあったのは無傷の怪獣の姿であった。驚くべきことにその喉元には銃創どころか、傷の一つさえ付いていない。

「フジモリヒマリ」

怪獣はその名前を呼びながら、規律正しく並んだ牙を揃えて、ニーツと嗤ってみせる。

「コイツ……ッ！」

不意打ちに失敗した時点で、コイツが一筋縄で行かないことはもう十分に理解できた。では、そんな相手に対し、右腕の壊れた状態で勝機があるのかだろうか。

『———そう、固くなるなよ。もっと非日常を楽しむんだ』

「なんだ……？」

不意に、そんな声があったような気がした

『あっ、マイクテス、マイクテス』

いいや、気がしたのではない。

ヘッドセットにはテレフォンマークが表示され、「何処かの誰か」との通信が接続される。

『聞こえているかな、(エクステンド)のエゴシエーターくん？』

声の主は女性と思われる。ただ電波が不安定なのか、音声にはノイズが混じり、彼女の声を聞き取るだけでも精一杯だった。

『君は彼女のかな？ それとも彼女なのかな？ まあ、どっちでもいいな。それよりも、私の声が届いているのなら応えをくれたまえ』

どうやら、通信相手がどんな顔をしているのか分かっていないのも互い様らしい。

夕星は少し警戒しながらも、謎の声に応じることにした。

「誰だよ、アンタ？」

ヘッドセット内に仕込まれたピンマイクを出しながらに、こちらも彼女の正体を探る。

「俺は神室^{かむろ}夕星……悪いが、こっちは取り込み中なんだ。得体の知れない声の相手なんてして暇はねえぞ」

『カムロユウセイ……ほう。君は神室君というのかい？』

彼女の声はしばし、意味深に黙り込む。僅かに「ジジ……ジジ……」と音が漏れるのは、通信機の向こう側で彼女が笑いを堪えているからだ。

「そのリアクション……アンタ、俺のことを知ってるんじゃない？」

『あー、いや。完全にこっち都合の話だから気にしないでくれたまえ。それに君の前には、もっと気にすべき相手がいるだろう』

（エクステンド）の目の前では、怪獣が腰を下ろしながらに、腕を後方へと引き絞っていた。

もう一度、その発勁で（エクステンド）を壊さなければ、気がすまないと言いたげである。

「クソ……どうやら俺には、アンタが誰かを考える余裕さえないんだな！」

『ははっ、どうやらそうみたいだな♪』

彼女は何処かからこちらを見ているのだろうか。その笑い声は心底、腹立たしいものであった。

怪獣は未だ無傷のまま。コックピットには得体の知れぬノイズまみれの声が響きわたる。

状況は好転するどころか、どんどん混沌ケイオスへと転がり落ちているような気がした。

『まあ、そうイライラするなよ。神室くん』

「馴れ馴れしく呼ぶんじゃないやねえ。つか、アンタのせいでイライラしてるんだからな！ この覗き魔の悪趣味女め！」

『それは心外だな。せっかく、エゴシエーターとして覚醒したばかりの君に、あの怪獣を倒すまでのレッスンをしてやろうと思ったのにな』

夕星は眉を顰める。

今のが聞き間違えないというのなら、彼女は怪獣の倒し方を知っているというのか。

『ふふっ。それとも君にはこう言った方が良かったかな？（エクステンド）の真の力を——』

——「スターレター・プロジェクト」から始まった小さな奇跡を解き放つ方法を、この私がレクチャーしてやろう』

07

「なあ、アンタ。さっきの言葉に嘘はねえんだな？」

『無論さ。こんな非常時に嘘をついてどうするというんだか』

「アンタのテンションが非常時のそれじゃないから不安なんだよ」

何故だかは解らないが、夕星ゆうせいにはヘッドセットを介して（エクステンド）の操縦法が頭に流れ込んできた。

そんな自分でさえ、知り得ない機能がこの（エクステンド）にはあるというのか？

『まず前提として。（エクステンド）に備えられた二丁の突撃機銃は、我々ARRAMSアールアムズが強奪

し、無理やり増設しただけの予備兵装に過ぎない。だから、その銃じゃ牽制こそ出来ても、君と同じエゴシエーターによって生み出された怪獣には通用しないんだ』

「待て待て、難しい専門用語ばっか使いやがって！ もっと俺みたいなバカでも分かるように説明しやがれ！」

『失敬。君にも分かりやすく説明するのなら、そうだな。——いまの〈エクステンド〉には、奴を倒せる武器が搭載されていないんだ。ただの一つもな』

夕星は今日まで〈エクステンド〉が怪獣に勝利する瞬間を幾度となく見てきた。けれど、その決着の全てが近接攻撃によって付いていたことに、今更ながら気付かされる。

確かにこれまでも〈エクステンド〉は、突撃機銃を用いたこともあったが、ノイズまみれの声と言うように、使われた用途は牽制程度。それが決定打となったことなど、ただの一度もなかったのだ。

では、あの怪獣を倒すには、近接に持ち込み、殴り倒すしかないというのか？

〈エクステンド〉の右腕は完全に壊れてしまっている。そんな状態で敵に素手の殴り合いを挑もうなど、無謀としか言いようがない

「理不尽もいところだな……」

落胆にくれようと、そんな事情を怪獣は知り得なかった。

伸ばされる両腕は胸部の装甲を……いや、恐らくは襟首を狙っている！

『おや、今度は柔道みたいだ』

〈エクステンド〉が、組んで、投げられでもすれば、操縦席を備えた頭部も確実に地面へと衝突する。そうなれば中の夕星も、鉄と鉄の板挟みだ。

「このッ……！」

夕星は咄嗟に踏^{キック}板を蹴って、バックステップ。怪獣の爪は装甲をガリガリと削りながらも、〈エクステンド〉を捉えるには至らなかった。

だが、次も避けられるとは限らない。

それどころか夕星の三管器官は、機体の急性動によってよって激しい負担を掛けられていた。車酔いならぬ、〈エクステンド〉酔いだ。

何故ロボットもののアニメや漫画で、パイロットたちが揃いも揃ってスウェットのような専用のスーツを着込んでいるか、わかった気がする。あれは操縦者の貧弱な肉体を庇護するためにこそあるのだ。

「決めたぞ……この野郎を倒したら、絶対パイロットスーツを作るんだ。デザインもカッコよくて、機能性の高いヤツ！」

なんて自分を鼓舞してみたが、

それは強がりにはかならない。〈エクステンド〉には、あの怪獣に通じる武器がないのだから。

「……いっそ差し違える覚悟で突っ込んでみるか。相応の質量がブチ当たれば、野郎もタダじ

や済まないはずだろうし、」

震える指先で操縦者を握りしめる。玉碎覚悟でそれを押し倒そうとして、

『自暴自棄になるには少し早すぎるぞ。我々A R A M Sが願いをかなえるためには、まだ〈エクステンド〉を失うわけにはいかないんだ』

ノイズまみれの声が通信機越しに囁く。

『もちろん、乗り手である君もな。——それに言っただろう？ 私が〈エクステンド〉の真の力を教えてやるって』

『だったら、勿体ぶってないで、それを早く教えやがれ！』

こっちにはもう後がないのだ。顔もわからぬ相手に言葉を選んでいる余裕もない。

「まあ、まあ、そう急かすなよ。〈エクステンド〉が秘める力にはわかに信じ難いものだからな。どう伝えていいか、私も迷っているだ」

「この際だッ！ どんなミラクルでも信じてやるッ！」

向こうから聞こえる「ジジ……ジジ……」というノイズ。またも彼女は笑いを押し殺しているのだろう。

『なら教えるよ、〈エクステンド〉の備える真の力。それは「現実改変能力」だ』

「現実……改変だと？」

『現実固定定数に干渉し、君たちの日常を歪曲させうる力だ。もちろん、制約もあるし、なんでも好き勝手に現実へ干渉できるわけじゃないよ。ただ、そうだな』

効果の有効範囲は〈エクステンド〉を中心に半径一〇メートル程度。

範囲内に存在する物質を一度砂塵に変換することによって、それらを材料に様々な武器を創り出すことができるらしい。

『目には目を。歯に歯を。エゴシエーターにはエゴシエーターを。そうやって創られたエゴシエーター製の武器であれば、あの怪物にも有効なはずさ』

正直、彼女の説明はほとんど理解できなかったし、容易に受け入れられるものではなかった。

それに〈エクステンド〉にそんなチートじみた力が備わっていると仮定して。その力を解放するにはどうすればいいのか？

夕星はコックピット中を見渡したが、それらしいスイッチを見つけることは叶わなかった。

「じゃあ、その現実改変能力を使うにはどうすれば良いんだよ！」

『簡単さ。君はただ目を閉じて、願うだけでいい。それだけで簡単に願いは叶うんだ』

「そんな、都合いいわけ」

『そんな、都合いいわけあるだろ？ 君は既に「願い」の力で砂になった〈エクステンド〉を作り直してみせたんだから』

しばしの沈黙の後に、夕星は深呼吸をすることにした。

一度力を抜いて、解れ掛けていた集中の糸を紡ぎ直す。

「……」

何が、願いは簡単に叶うだ？ そうであれば、誰も苦勞はしないのだ。

だが、夕星はその可能性に縊らなければならない。あの怪獣を倒し、陽真里を守る為に――

「わかった。やってやるよ」

瞳を閉ざし、願いを明瞭にイメージする。

それに応えるように、辺りの建造物が砂塵と化して〈エクステンド〉の元へ集約された。そうやって形作られるのは紛れもない、一本の刀剣である。

『日本刀を模した実体剣か。ロボットものにおいてはビームサーベルに次いで、ベタな武器を選んだようだね』

「うるせえな、なんだっていいだろ」

〈エクステンド〉は刃を手にとって、それを担ぐようにして構えた。翡翠色をした双眸のカメラアイは輝きを増し、目の前の敵を睨みつける。

対峙する怪獣が取ったのは、前腕で上半身をガードするコンパクトな構えだ。

ここにきて始まりのボクシングに戻してきたか。恐らくは刃による初撃を躲し、以前のようにカウンターを狙う魂胆であろう。

「ここまで来て原点回帰か……けど、安心したぜ、武道家気取り」

『ほう、それはどうしてかな？』

「だってそうだろ？ あの怪獣は他の怪獣と何もかもが違う。だから突然何をして来ても不思議じゃねえんだ。それこそ、いきなりビームとか撃って来てもな」

けれど、怪獣はそうしない。あくまでも武道や格闘技術での決着を望んでいるように見えるのだ。

勘になってしまいが、野郎に隠された奥の手はない。あの四肢から繰り出される変幻自在の技の数々こそが野郎の切り札なのだから。

「さあ――！！」

勝負は一瞬だ。創造した刃の間合いに怪獣が飛び込んでくる。その一瞬で、

「解除ッ！」

〈エクステンド〉は刀を宙に放った。マニピュレーター 掌 から離れたそれは、また一瞬で砂塵へと崩れ去る。

きっと、怪獣は自分のことを存分に警戒してくれたのだろう。「わざわざ、武器を捨てるなんて、何かある」と。

一丁前にデカイ図体をしている癖に、そんな小狡いことを考えてしまったのだから、怪獣は足を止めてしまったのだ。

「もう一回言ってやろうか？ フェイントだって」

夕星は一瞬のチャンスを絶対に逃さない。

〈エクステンド〉は頭上に舞い散る砂塵へと手を伸ばし、そして再び願って見せる。
「テメエにはさんざん追詰めてくれたお礼に、一つ良いことを事教えてやるよ。殴らせずに勝つのが武道や格闘技だって言うのなら、殴り殴られるのが勝負って言うんだ。んでもってな」
砂塵はグローブの形を成してエクステンドの左拳を覆った。
さらに壊れた右腕を補強するように砂塵を集約、無理やりにでも動かしてみせる。
「勝負はビビった方の負けなんだよッ！」
〈エクステンド〉の両拳が連続で入った。

『CONGRATULATION———さあ、トドメを刺せ、エゴシエーター!』

最後に夕星は、機体の右脚を振り上げる。
鉄脚一閃。舞い散る砂塵で脛部に新たなブレードを創造し、回し蹴りを放った。

08

真横に裂かれた怪獣は、砂塵と化して、その場に崩れ去る。

だが、夕星は砂塵は崩れてゆく怪獣に目もくれようとしなかった。代わりに機体各部のセンサーをアクティブに。機体の全機能とカメラアイを介して、閑散として街中を見渡す。

そして、見つけたのだ。

「……よかった」

ズームインした〈エクステンド〉の視線の先には、陽真里がいた。両掌を口元に当てて、逃げ遅れた人へ避難を呼び掛けているではないか。

「……まったく、お前が一人で避難すれば良いだろうに。こんな時までクソ真面目なんだな」
何気なしにポケットから携帯を取り出せば、無数の通知が届いていた。

そのほとんどが彼女からのメッセージだ。「今どこにいるの?」「ちゃんと避難してる?」「という心配から始まり、最後の方は「早く返信しなさい!」「無視すんな!」と露骨に苛立っているのが伺える。

「はは、無茶言うなよ」

こっちは〈エクステンド〉に乗って、怪獣と戦っていたのだから。

きつと陽真里は、自分が怪獣に狙われていたことなんて知りもしないだろうし、これからも知らなくていい。

「ふう……」

そこで夕星はようやくと安堵の息を漏らすことができた。

身体を浸すのは心地の良い疲労感だ。自分があの怪物を倒したという事実を今更ながらに自覚して、ようやくある種のプレッシャーからも解放される。

「とりあえず、一件落着……で良いんだよな？」

携帯にはさらに新着の通知が一件。今度は十悟じゅうごからメッセージが届いていた。

「下を見てみる……だ？」

小首を傾げながらも、〈エクステンド〉の視線を足元へと下げれば、一代のバイクがこちらに向かって来ていることに気づく。

そこに跨る白学ランの少年は紛れもない十悟であった。仮にも進学校に通う生徒がノーヘルメットの片手運転で、大手を振るう姿はなかなか奇妙なものだ。

「おい！ ター星ー！ 気づいてるかー！」

「マジかよ、お前」

夕星もすぐに〈エクステンド〉の膝を折り、コックピットを覆う装甲板を押し上げた。

「どうしたんだよ、そのバイク？ まさか、どっかの駐輪場から盗んできたんじゃない？」

「ばーか。お前じゃあるまいし、道端に乗り捨てあったやつを借りて来ただけだよ」

いや、それは大して盗んだのと変わらないような……

「つか、バイクじゃ追いつけねえし、危ないから止めるって言ったのはお前じゃなかったか」

「あれ、そうだったかな？ けど、世の中には抜け道ってもんが幾らでもあるからなあ」

十悟はそう言ってニヤリとほくそ笑んだ。

一体、どんな裏技を使って追いついたのだから。この悪友は時にとんでもない事を思いつくから恐ろしいのだ。

「それよりも」と前置きをした十悟は、膝立ち姿勢の〈エクステンド〉を興味深く観察し始める。

「〈エクステンド〉の足元に、こんな飛行機の翼みたいなパーツって付いてたか？ しかも片脚だけってバランスも悪いだろうに」

彼が目をやったのは、〈エクステンド〉の「現実改変能力」よって増設された脚部のブレー

ドだ。

「えっと、そいつは……なんて言えば良いんだろうな」

夕星は少しどう伝えれば良いか迷いながらも、〈エクステンド〉に搭乗した際の一部始終を話すことにした。

自分には何故か機体の操縦方法が、手に取るように理解できたこと。

そんな自分でさえ分からなかった〈エクステンド〉の真の力を、謎のノイズまみれの声が教えてくれたこと。

どれも眉唾には信じ難い話であるが、それにいちいち突っ込んでいてもキリがない。

十悟は相槌を打ちながらに話を聞いてくれた。

「なるほどな……他に気づいたことはあるか？」

「ノイズ塗れの声がなんか難しい専門単語をいろいろ使ってた。ARMSだとか、エゴシエーターだとか。あとは……なんつか、あの女の喋り口調をどこかで聞いたことがあるような気がするんだよ。あっちの反応的にも俺の名前を知っているようだったし」

そう言えば、あのノイズまみれの声との通信もいつの間にか途切れていた。用があるときだけ一方的に語りかけてきて、全てが終わればガチャ切りなんて、なんと薄情なのだろうか。

「聞けば聞くほど分からなくなりそうだな……まあ、とりあえず、その頭の奴を取ろうぜ」
「頭の奴？」

「そのゴツいVRゴーグルみたいな奴だよ」

夕星はそこで、自分がヘッドセットを付けたままであることに気づいた。あまりに自分の顔にフィットするから忘れていたのだ。

ヘッドセットを外せば、陽光が直に瞳へと差し込まれた。あまりの眩しさに瞼を開けては、閉じてしまう。

そして、ふと自分の瞳を見た十悟が絶句していることに気づいた。

「おい、夕星……その目、ちゃんと見えてんのか!？」

十伍は明らかに取り乱している。

「えっ、ちょっと待て……なんだよ、いきなり」

「いきなりも何もねえだろ。なんだよ、その歯車みたいな目は!？」

歯車みたいな目……？

そんな事を言われたって、夕星自身には自覚がない。見える景色がおかしくなったわけでもなければ、眼球に痛みがあるわけでもないのだ。

ただ、一つ違和感があるとすれば、向こうに暗い光の点があることくらいで、

「なんだ、あの光は？」

不意に何か右頬を擦過する。

感じたのは僅かな痛みと灼熱感だ。つー、と血を流しながらに夕星は理解する。——あ
の光の点が、まるでレーザーのように自分の真横を通過したのだと。

「………嘘だろ」

それだけじゃない。

あの光はきつと自分の頭を狙ったものなのであろう。根拠はなくとも、光の飛んできた方から、どうしようもない「敵意」と「殺気」を感じるのだ。

だが、奇しくも光の射線はほんの数ミリ程度、夕星から外れていた。頬を焼かれるだけで済んだのは、それが要因であろう。

「………嘘だろ……嘘だろッ!？」

そして、外れてしまった閃光は自分の頬を穿つよりも先に、前へと立っていた十五の胸を撃

ち抜いていた。

「——ッッ！」

もはや夕星には頬の痛み程度、どうでも良くなっていた。

悪友の胸には、まるで赤い大輪が咲いたと見紛うほどの血で濡れていたのだから。

09

糸が切られた人形みたく、十悟じゅうごの身体は一回転しながらに濃淡なアスファルの上へと倒れ込む。

「ああ……ああ……ああッ！」

夕星ゆうせいは数秒の間を立ち尽くしてしまった。目の前で起こったワンシーンの意味を理解しなかったのだ。

けれど、目の前に広がるノンフィクションはそれを許さない。

「クソッ！ クソッッ！ 何だっつんだよ!？」

我に返った夕星は咄嗟に彼の傷口を抑えるも、それは意味を為さない。指と指の隙間から、熱を持って流れ続ける血液に反し、悪友の身体はどんどん体温を失ってゆく。

「……ふざけんなよッ」

噛み潰した奥歯からは軋むような音がした。

真っ赤に染まってしまった拳を握りしめ、ボソリとは呟く。

「なあ、〈エクステンド〉もう一度俺に力を貸してくれよ……友達の仇を取りたいんだ」

伸ばされた 掌てのひら は二人を庇護するようだった。

夕星は瀕死の重体を負った悪友を抱き締めながらに、再びコックピットへと身を委ねる。そして、ヘッドセットを装着し——

「お前が何処の誰かなんて知らねえし、興味もねえ……だけどな、十悟をやりやがったことだけは許さねえッからな！」

カメラアイをズームして、皓しろい閃光が迸った方へと視線を遣った。

数一〇〇メートル先の色彩と画質のブレを修正。その仇敵の姿を脳内へ焼き付けようと、瞳を凝らす。

けれども、ソイツの姿は夕星の想像から遠く駆け離れたものであった。

あの閃光の正体は何なのか？ 恐らくは遠距離狙撃銃スナイパーライフル辺りであろうと夕星は当たりを付けていた。

やや現実感に欠ける話かもしれないが、〈エクステンド〉のようなオーバーテクノロジーが存在しているのだ。もし仮に、ソイツがビールライフルのような獲物を所持していたとしても少し驚かされる程度で済んだのだろう。

しかしながら、夕星は自らの瞳を疑うこととなる。

「木の杖だと……!?!」

それはある種、工学技術の体現とも言える〈エクステンド〉とは対を成すようなものだった。先端に宝石が嵌められ、金属やリボンで仰々しい装飾が成されていたそれはまさに、「魔法の杖」というのが称するのが相応しい。

〈エクステンド〉と対を成すのは、何も杖だけじゃなかった。それを握りしめるソイツもまた夕星の想像を超える風貌をしているのだから。

細身のシルエットからして、女性であることは間違えない。だが、からすば鳥羽のようなローブを羽織り、三角帽を目深に被る彼女の姿はどう見たって、「魔女」と形容する他ない。

「んだよ……なんだってんだよ、そのふざけた格好はッ!」

吠える夕星に反して、〈エクステンド〉のセンサーは過度な熱源と、メルマ現実固定定数の急激な変動を感知する。

魔女が握りしめた杖の先に現れるのは、複雑怪奇な魔法陣だ。きっと次弾を装填しているのだろう。

魔法陣の展開に合わせ、彼女の纏うローブと帽子の鏝がバサバサと靡く。まさに黒鳥がはばたくが如く。そして、ほんの一瞬。——彼女の双眸に埋まる歯車のような瞳孔が露わとなった。

「なっ……」

夕星はこの現状を、ほとんど理解できていない。

言葉話す怪獣に、砂から復活した〈エクステンド〉。それに覆い被せるように、今度得体の知れないの魔女が現れたのだ。

データラメで過剰積載な一部始終は、まるで熱に侵された最中に見る白昼夢か、はたまた稚拙な空想がぐちゃぐちゃに混ざり合っているようであった。

ただ、夕星はほとんど直観で言葉を紡ぐ。

「テメエもあのノイズまみれの声が言ってた、エゴシエーターって奴なのか!?!」

魔女が閃光を撃ち放った。

まるで「答える気はない」と言いたげに、光は直進する。

「クソッ……上等じゃねえかッ!」

ならば、夕星も闘争心のまま願うだけだ。

辺りの一切合切を砂に変え、〈エクステンド〉の背後に創造されるのは一対のレールカノン電磁砲だった。

「むむむ、」

短冊を模したメッセージカードの裏には「スターレター・プロジェクト」と、幾つかの企業名が綴られていた。

どうやら、ここに羅列された企業たちが人工衛星を開発しているらしく、そこへ全国の少女から募集した「願いごと」を乗せて、宇宙へと打ち上げるそうだ。

大仰なプロジェクト名に対して内容は呆気ないほどシンプルで。今の夕星ならば、それが企業たちのプロモーション戦略であったことも理解できる。

けれど、当時の自分はまだ十歳になったばかりの子供だったのだ。「お星様に願いが届けば——」なんて謳い文句を本気で信じていたのだろう。

だからこそ、幼い夕星がメッセージカードに向き合う態度も、また真剣であった。プロのスポーツ選手にもなりたいし。ゲームの世界大会で優勝もしてみたい。

ベルトを巻いてヒーローにだって変身してみたいし、ドラゴンと友達になるのも悪くない。そうやって頭に浮かんだ空想や「願いごと」を書いては消してを繰り返しているちに、いつの間にか放課後になっていたと言うわけだ。

何度も書き直したメッセージカードはすでによれきっていた。きっと、これ以上の書き直しもできないだろう。

「いい加減、決めないとなあー」とぼやきながら、瞳を伏せた。

そして、やはりこれしかないであろう、と2B鉛筆を走らせる。

『カッコよくて大きなロボットに乗ってみたい』

夕星は自らが選んだ「願いごと」に満足し、席を立った。

あとはこのメッセージカードを職員室で待つ担任に渡すだけだ。足早に教室を去ろうとした、すぐそこで——



どうして、今になってそのことを思い出すのであろうか？

「たしか……俺は、あの時にヒバチの奴と……」

夕星の意識は次第に明瞭になってゆく。頭には泥を詰めたような倦怠感こそあれど、目を開けられないほどじゃない。

ゆっくりと上体を起こしながらに、辺りの様子を伺った。

ここは清潔感のあるベッドの上。ぴしゃりとカーテンが閉ざされた窓に、ツンとした匂いを放つ薬品棚。

そして向かいには、自分に対し背を向ける女性の姿があった。

愛用の拡声器を手にした彼女はきつと、養護教諭の未那月美紀みなつきみきに違えない。

ならばここは学校の保健室であろうか？

「えっと……」

夕星は頭の中で一つずつ起こった出来事を整理して、そして自ずと一つの答えを導き出した。砂塵と化した〈エクステンド〉が復活してから、謎の魔女に十悟じゅうごが胸を貫かれてしまうまで。

——その全てが悪い夢であったと。

きつと自分は放課後になる直前で、貧血か何かで倒れてしまったのだ。

そんなコンディションだったのだから、次から次へと展開が移り変わる奇妙な悪夢を見てしまったのだろう。

「そうだよな。怪獣が喋ったり、俺が〈エクステンド〉に乗れるわけもないからな」

夕星は拳を強く握り締め、今が現実であると確信を得た。

「はは！ まして、あの十悟が死ぬなんて、」

そして、無理にでも笑うことで脳裏に焼きついてしまった光景と、指先に残る血液の温もりを忘れようと努めた。

「かむろ神室くん、残念ながら君が体験した一部始終は紛れもない現実だ」

だが、彼女はそれを許さない。

「えっ……」

「血の付いた学生服はこちらで処分させてもらったが、そうだな……額に指を当ててみたまえ」
恐る恐る指先を伸ばせば、ジクリとした痛みに当たった。

「その傷は、あの怪獣が現れたときに君が負った傷のはずだ」

「なっ……なんで!？」

「もう一度教えようか？ 君が体験したことは全て事実で、夢や幻でもない。その証拠に君の身体にはダメージが残っているし、エゴシエーター能力の酷使で体力を使い果たしたからこそ一時的な昏睡状態にも陥ったというわけだ」

「エゴシエーター」—— とも飛び出してきたその単語に夕星は思いっきり眉を顰めた。

「アンタ……本物の未那月先生か？ あの人は確かに変人だが、それでも、一教師の範疇にとどまる程度の変人な筈だ」

「ほほう？」

少しづつ警戒心が強まっていく夕星に対し、未那月先生は余裕のある態度を崩そうとしない。「神室くん、どうやら君は三つの大きな誤解をしているらしい。だから、その誤解を一つずつ、丁寧に紐解いていこうじゃないか！」

「まず一つ」と、彼女は閉ざされたカーテンを掴んでみせた。

「君はここを学校の保健室と思っているようだが、それは不正解だ。よく思い出しても見たま

え、若干室内のレイアウトが私の保健室とは異なっているだろう」

彼女がカーテンを開けば、眩い陽光と共に外の景色が飛び込んできた。

「なっ……!?!」

窓の外にあったのは澄み渡る一面の青空と、巨大な雲の群れだ。

逆に言えば、それ以外が何も無い。けれども、そんな退屈な景色が少しずつに前方から後方へと流れてゆく。

「ここは高度一〇〇〇〇メートル。上空に浮かぶ反重力飛行艇（ペンシル&ノートブック号）の医務室さ」

「飛行艇だ?!」

「なんなら、あとで艇内を見て回るといい。食堂に売店と設備も充実しているし、反重力エンジンや整備ハンガーなんか男の子にとっては、ロマンを感じられるものに違いないだろうからね」

未那月先生の発言は、そのどれもが絶妙にズレていた。空気が読めているとも言い難い。

その証拠に夕星の神経は、先ほどから逆撫でされっぱなしなのだから。

「おい、アンタッ！ 人をおちよくるのも大概にしるよな、だいたい俺が聞きたいのはここがどこかじゃない。空の上だろうが、海の底だろうが、んなことはどうだっていいんだ！」

「ほう、ならば何を聞きたいのかな？」

「全部に決まってるだろ！ ただ、今はとりあえず、アンタがどうして未那月先生に化けてるかを教えやがれ！」

「ふむ……どうやら神室くんは、私のことを養護教諭・未那月美紀に化けた偽物か何かだと考えているらしいが、それこそが二つ目の誤解なんだよ」

彼女は偽物でも本物でもない。ただ、強いていうなら「偽装を解いた」というべきか。

「私にとっては養護教諭の方が仮の姿なんだよ。調査をスムーズに進めるためには、私自らが、全国の高校を一定周期で転々とする必要があったからね」

彼女はこちらへと向き直ると、羽織っていた白衣を脱ぎ捨ててみせた。

露わとなる、紺のスーツ姿はスレンダーな彼女によく似合う。そして胸元に止められたネク

タイピンには「ARAMS」と綴られていた。

「そう言えば、お客人に対して自己紹介と歓迎の挨拶をしていなかったね。では改めて。私は未那月刀剣術の師範代にして、秘密結社ARAMSの設立者、未那月美紀だ。——そして、ようこそ我々の組織へ」